

SABS Journal No. 101

発行日 2018年6月15日(金)

URL <https://sabs.sabsnpo.org/>

このジャーナルはもともとバイオテクノロジー標準化支援協会(SABS)内部向けのものでしたが、数年前から、少しでもバイオテクノロジーにご関心のありそうな方々に向けても配信しています。ご興味のない方はこのメールに返信して配信不要の旨をお知らせください。

SABS ジャーナルでは、故奥山典生都立大名誉教授が毎回様々な分野にわたり、次から次へと溢れる蘊蓄を披露されて居られました。その後、奥山先生のご遺志を継ぎ協会を続け発展させて行くため毎月の定例会を継続し、いろいろな方々がそれぞれ専門の話題を提供し話合っ、親睦と勉強を深め、当会の活動の一助となるよう努めて参りました。

現在、このジャーナルを読んで下さる方々は数百名に上ります。ぜひ読者の中から話題提供をして下さる方が出てきて頂けることをお待ちしております。このメールに返信して頂ければ幸いです。ご感想、エッセイなどのご投稿も大歓迎です。連絡先は thiyama@athena.ocn.ne.jp です。なお「医学と生物学」誌の復刊準備もあり当会のホームページが昨年末一新されました。ぜひ <http://sabsnpo.org/index2.htm> にアクセスしてご覧ください。

1) 昨日・今日・明日

今年もいよいよ梅雨入りしてしばらくになります。どうも近年は昔のような「ジメジメ」という感じの日が少なくなってきたような気がするのは私だけでしょうか。春が非常に早く終わって4月に入ると初夏みたいになり夏日まである騒ぎ。そして5月には盛夏みたいな日々が続いたのですが。気候変動はこれからどうなっていくのでしょうか心配ではあります。毎度で恐縮ですが、気候変動は Fake News だと言っている人物が絡むお話に移ります。

先月、「このところこれまでも増して世界情勢とりわけ我が国周辺の情勢が激しく動いています。隣国は永年にわたり東西に分断されていますが、近いうち大きな動きがあるかも知れません。その中心の一人が矛盾だらけの現米国大統領だとは何とも皮肉です。どうなることやら」と書きました。遂に今週、この「毒を以て毒を制す」みたいな話の実現しました。小さな国ながら原爆を作ってしまった世襲の3代目独裁者と、世界一大きな国の成り上がり不動産屋が「間違っ」大統領に当選してしまったという人物。この二つの「毒」のどちらがどちらを制したのかあるいは何も進まなかったのか、二人お手々つないで歩く姿をテレビで見ただけでは分かりませんでした。にも拘わらず朝から晩までこの実況放送を見てしまった自分に呆れている今日この頃です。少しでも良い方向に進むことを切に希むしかありません。

ところで今週“日本の科学技術「力が急激に弱まった」 白書を閣議決定”という記事が出ました（朝日新聞 2018年6月13日朝刊）。白書の全文は今これを書いている時点で未だ読んでないので記事を全部引用させていただきます。

“政府は12日、科学技術について日本の基盤的な力が急激に弱まってきているとする、2018年版の科学技術白書を閣議決定した。引用数が多く影響力の大きい学術論文数の減少などを指摘している。白書によると、日本の研究者による論文数は、04年の6万8千本をピークに減り、15年は6万2千本になった。主要国で減少しているのは日本だけだという。同期間に中国は約5倍に増えて24万7千本に、米国も23%増の27万2千本になった。また、研究の影響力を示す論文の引用回数で見ると、上位1割に入る論文数で、日本は03～05年の5.5%（世界4位）から、13～15年は3.1%（9位）に下がった。海外の研究者と共同で書いた論文ほど注目を集めやすいが、日本の研究者は海外との交流が減っている。00年度に海外に派遣された研究者の数は7674人だったが、15年度は4415人に。海外から受け入れた研究者の数も、00年度以降は1万2千～1万5千人程度で横ばいを続けている。白書は大学に対し、会議を減らして教員らが研究に割ける時間を確保することなどを提言。政府には研究への十分な投資や、若手研究者が腰をすえて研究に取り組める「環境の整備」などを求めた。（小宮山亮磨）”

<https://www.asahi.com/articles/ASL66539WL66ULBJ005.html>）。

本ジャーナルでも度々この問題について、ノーベル賞受賞者の発言も引用しながら、取り上げてきましたので、ようやく内閣も気付いたのかという思いです。でも最後に「白書は大学に対し、会議を減らして教員らが研究に割ける時間を確保することなどを提言」というくだりを読んで唖然としました。何をおっしゃるウサギさんです。「会議を減らす」などという見当違い。もともと大学の先生がたは会議嫌いだしそんなに開いても居ません。「研究に割ける時間を確保する」ためには、まさに研究への十分な投資や、若手研究者が腰をすえて研究に取り組める「環境の整備」ということなのです。これには研究職、教育職、更に現在皆無に近くなってしまったサポート職（技術員、いわゆるテクニシャン、事務職など）の数を雇用期限なしで大幅に増やすなど、予算の大幅な増額なしでは実現不可能な政策が必須なのです。そもそも科学技術庁は科学技術省に格上げし文部省は教育省としてどちらも予算を数倍にすべきだったのに「規制緩和」「合理化」「小さい政府」などを理由にモンカショウなんて名前の一つの省にしてしまった上、もともと少なかった予算は更に減らしてしまいました。2004年の国立大学法人化はその一環で、もともと国家公務員の総数を見せかけで減らそうという姑息な思いつきから出たわけですが、実現してしまい、結果は研究・教育のための予算の大幅な減額となって今日に至っています。筆者(檜山)は2004年3月国立大学を定年退職しましたが、最後の数年間は評議員として毎日毎日それこそ無駄な会議に引っ張り出されていました。法人化したらどうなるか今から準備しておこうという法人化対策委員会とかいう勉強会みたいな会議なのですが、そこであるとき数百ページに及ぶ参考資料が配布されました。その書類の内容は法人化とはどう見ても関係なく、読んでみると結論は何と“先進国の中で日本の大学の研究・教育予算が断凸ならぬ断凹に低い”ということでした。20年近く前、もともと大蔵省から回ってくる予算が他省庁に比べ少ないことを憂いた当時の文部省のお役人たちが一生懸命調べて書いた報告書らしいのですが、この書類はただ配られただけで説明も議論もありませんでした。回収もされなかつ

たので今でも手元にある筈ですがいずれまたご紹介したいと思っています。今ここで言いたいのはその頃より更に予算が減らされているということです。

奥山先生懸案の「医学と生物学」復刊準備は遅れてはいますが、近いうちに復刊第1号を発行出来ればと思っています。いつも申し上げているようにこの雑誌の扱う分野は1942年の第1巻から非常に幅広く医学と生物学に関係するあらゆる分野が含まれていました。2013年の最終号では、看護学、老人医学、リハビリ関係、小児科、心理学・精神科、栄養学・食品、薬学関係、臨床医学、解剖学、動物学、生理学、保健予防医学、医学教育、細胞生理学、植物学、歯科、皮膚科、免疫学、臨床検査、環境など非常に幅広い分野を網羅しています。復刊誌は、旧「医学と生物学」と同様に医学中央雑誌に登録し、投稿原稿は受付してから2週間以内に査読を完了し受理の可否を投稿者に伝え、また原則として受理した投稿論文は受理から1カ月以内に掲載するつもりです。国際的に認められていた速報誌の復刊ですので、このニュースレターをお読みの皆さまにもぜひご投稿頂きたくよろしくお願いいたします。

さて前回の定例会では話題提供は再び松本邦男先生にお願いしました。松本先生は永年ご自身も携わってきた抗生物質関係を中心に近年は科学史研究に関わって来られ学界発表もしばしばされて居られます。これまで当会でも何回にも渡って、戦中に様々な学界の学者が協力して英米でも実用化されたばかりのペニシリンの開発を日本で独自に行った歴史について「国産ペニシリン開発史」として膨大な史料をもとにお話を頂いてきました。

野口英世関係でも最近これまで知られていなかったいくつかの資料を発掘されました。それらは、渡米するまでに、野口英世に影響を与えた人たち、野口英世自筆の履歴書（東大医科研から入手）、内務省からの伝染病研究所雇用に関する書類、済生学舎関係、当時の伝染病研究所の写真、野口英世が勤務していた横浜開港検疫所などです。これらを中心に、野口英世が細菌学者として踏み出すまでの過程についてのお話しされました。武野さんのお話以来、改めて野口英世に興味を持ち始めていたので出席者一同で話は大いに盛り上がりました。

さて次回の話題提供ですが久本泰秀(ひさもとやすひで)さんに「機器開発・分析—50年の経験を中心に」という題でお願いすることになりました。久本さんは故奥山典生先生とも親しく当ジャーナルの永年の読者でもあります。ホームページから引用するとご経歴は以下のようです。

北大理学部物理学科卒業後、日立製作所、計測器事業部入社。本社計測器事部、超エルエスアイ研究所、応用技術部、ME事業推進部、分析機器工業会などにて、質量分析開発、半導体用機器開発、医療用機器（MRIなど）開発、環境分析、食品分析応用技術発、海外事業開発などに従事。定年退職後、JICA専門家としてインドネシア環境管理センターにて環境分析指導。国立環境研究所フェローとして、神栖町ヒ素汚染対策プロジェクトに参画。現在は、エアサービス有限会社代表、筆者檜山も会員であるNPO分析産業人ネットの理事です。エアサービス有限会社はインドネシアなどの東南アジアで分析機器関係の仕事をしています。環境計量、環境分析、食品分析関連コンサル関連業務、関連講演などで活躍されています。こ

うした活動と当会の田坂理事（経済産業省 OB）とは標準化関係で繋がりが深く関連のお話も伺えると考えています。

＊ ＊

＊ ＊

＊ ＊

2) 第 92 回定例会のおしらせ。

バイオテクノロジー標準化支援協会 第 92 回 定例会

日時： 2018年6月22日(金) 14時00分 – 16時00分

場所： 八雲クラブ（首都大学東京/旧都立大同窓会）ニュー渋谷コーポラス 10階

話題： 「機器開発・分析—50年の経験を中心に」

提供： 久本泰秀氏

参加費： 無料

* 定例会はどなたでも参加できます。皆さまのご参加をお待ちしています。皆さまのご参加をお待ちしています。

八雲クラブへの道順：

渋谷駅から井の頭通りの坂を東急ハズ目指して上り、ハズ建物を過ぎ交差点角を右に回って直ぐまた右に曲がるとハズ裏搬入口になります。その隣の建物がニュー渋谷コーポラスです。入口奥のエレベーターで10階に上がり直ぐ右隣です（地図参照、赤丸印）。



＊ ＊

＊ ＊

＊ ＊

定例会は原則として毎月第 4 金曜日 14：00-16：00 に八雲クラブで開いています（例外として 7 月、8 月および 11 月はお休みで、その代わり 12 月は第 1 金曜日に忘年会を兼ねて行います）。因みに既に今年は 3 月 23 日、4 月 27 日に会場を予約してあります。会員でも会員でなくても自由に出席して、自由に発言出来ます。友人同士誘い合わせてご出席ください。

このジャーナルは現在檜山が毎回拙文を執筆していますが、ぜひいろいろな方にご投稿頂ければと思っております。内容・字数は自由です。また定例会での話題提供も大歓迎です。時間は 2 時間程度ですが短くても長くても（この場合は 2 回以上に分けますが）また内容も自由です。ぜひ皆さまのご参加をお待ちしております。

＊ ＊

＊ ＊

＊ ＊

ホームページ <<https://sabs.sabsnpo.org/>> をご覧ください。本メールジャーナルのバックナンバーが全部収録してあります。

- ① 配信停止・中止希望は下記アドレスにメールにてその旨お知らせください。
- ② 配信先等の登録情報変更は メールにてその旨お知らせください。
- ③ バイオテクノロジー標準化支援協会に新規会員登録をご希望の方はメール下さい。
- ④ ウェブサイトに関するご意見もメールにて頂ければ幸いです。

(NPO) バイオテクノロジー標準化支援協会

NPO Supporting Association for Biotechnology Standardization (SABS)

〒173-0005 東京都板橋区仲宿 44-2

E-mail thiyama@athena.ocn.ne.jp

URL <https://sabs.sabsnpo.org/>

理事：荒尾 進介；小林英三郎；田坂 勝芳；松坂 菊生；檜山 哲夫

監事：堀江 肇

ネット管理：川崎 博史、田中 雅樹